

うんこの通知簿

北村 豊



奈良の実家での少年

時代には、11月から12月頃、リヤカーに秋まき大根を山ほど積んで、農家の人が「御礼」として運んで来て下さるのが、我が家の風物詩“となっていたことを、秋になると、とても懐かしく思い出す。

御礼の対象は、水洗

便所の無かった当時ではごく普通の“ぽつとん便所“に溜まった、我が家の困り物の「うんこ」に対してであった。

化学肥料もない当時の農家では、糞便を畑近くの“田舎の香水“の漂う肥溜めで十分に発酵させ、肥焼けしないよう希釈して畑の貴重な肥料としてリサイクルしていたのである。

便槽を綺麗にしても

らった上、私達のし肥で元氣よく育った大きな大根を感謝の気持ちとしていたただくなんて、何と嬉しいことではないだろうか！

鎌倉時代に本格化し、1960年代まで続いた世界にも類を見ないであろうこの“し尿循環システム“は、その後、お金を払うバキュームカー、そして下水道へと変化していったが、昔の少年時代に見かけたし尿と大根の物々交換には、それをごく身近に見てこそ感じられる“お互いの温かみのある心の通い合い“があったのだった。

歴史を紐解いてみる

と、し尿の農地還元は、鎌倉時代から本格化し、江戸時代にはし尿は肥料の原料となる立派な“商品“として売買されていたそうである。SF作家で、学者

でもある藤田雅矢著の「糞袋」（1995年初版、新潮社）によると、昔は“し尿の質“によって甲・乙・丙・丁の四段階に分けられていたそうだ。甲や乙は栄養価の高い食事をしていた花街や公家・大名のモノで、価格が高く、一番価値が低かったのが牢屋のモノであったそうだ。

今や、日本は海外の化石燃料や鉱物資源から生産された化学肥料

原料の立派な輸入国になってしまっている。最近では、ロシアのウクライナに対する一方的な戦争の影響もあって農家が肥料価格の高騰に苦しんでいる。

一番身近でコストに1億2000万人以上から得られるバイオマスを化学肥料の使用量低減のためにも有効活用する方法はないものだろうか？寄生虫や田舎の香水の問題を起すことなくして……。

（上高井郡小布施町 信州口腔外科インプラントセンター所長）